

## 令和2年度学内版 GP 成果報告書

|   |  |
|---|--|
| 取組名称  | 学芸員養成・理学部自然科学系の授業・実習等と自然科学館の連携プロジェクト：国際ネットワークへの標本情報接続化および館外サテライト出展   |
| 実施組織<br>(または対象のカリキュラム)  | 理学部・自然科学館  |
| ※連携する他学部・機関がある場合は記入   | 学芸員養成課程(人文・工学部), 信州大学附属図書館・大学史資料センター, 国立科学博物館等地域の博物館, 松本市中央図書館, 松本市コンベンション協会ほか   |
| 実施責任者(所属)   | 東城幸治 ( 理学系, 自然科学館 )  |
| 取組の目標   | <p>① 学芸員養成・理学部自然科学系の授業・実習等における自然科学館収蔵試料の利活用</p> <p>② 自然科学館収蔵試料の国際データベース登録</p> <p>③ 自然科学館収蔵試料をベースとしたサテライト企画展示</p>   |
| <p>1.<br/>目標達成のために行った活動と成果<br/>(箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする)</p> | <p>① 学芸員養成・理学部自然科学系の授業・実習等における自然科学館収蔵試料の利活用</p> <p>コロナ禍で計画通りの授業等での利活用はできなかったものの、対面で開講することができた理学部内の授業を中心に博物館標本を活用した。またオンラインでの授業を余儀なくされたことから、GBIF/S-Netといったデータベースを利用したオンライン実習などを実施した。また、コロナ禍により、学芸員養成課程における最重要単位となる「博物館実習」について、学外の博物館での実習生受入が困難であったことから、特別措置として自然科学館内でも実習を実施した(自然科学館オープン以来、学内で実習を完結させたのは初めてのことである)。</p> <p>② 自然科学館収蔵試料の国際データベース登録</p> <p>国立科学博物館との連携のもと、約2.5万件の収蔵標本の国際データベース(GBIF/S-Net)への登録作業を実施した。この作業には、学芸員養成課程を修了した大学院生を中心に実施した。これまでの登録件数は約10万件となり、国内の大学博物館としてはトップクラスの登録件数となっている。また従来は、国立科学博物館が主催する連携機関との講習会やデータベース登録に関するセミナーやワークショップについては、各館から1-2名の参加に制限されたことから、本学からは責任者である東城ほか1名程度の学生を同行させる程度であったが、今年度の講習会はオンライン(オンデマンド型)で開催されたことから、博物館標本の国際データベースへの登録やその利活用に関心を持つ多くの学生にも参加してもらうことができた。また、これらの会議経費が大幅削減されたことによる講座の開催数も増加したことから、学芸員養成課程の学生にとっては、これらの貴重なオンライン講座を受講してもらうことができた。</p> |

**③ 自然科学館収蔵試料をベースとしたサテライト企画展示**

生物学分野の試料としては、100年超となる矢澤米三郎コレクション（松本女子師範学校・初代校長による明治・大正時代のコレクション）の中から、高山鳥・ニホンライチョウ剥製約50体、および高山植物・コマクサ標本6点からの遺伝子解析に取り組み、成果をあげた。このうち、コマクサ研究の成果については、信大NOWの特集記事としても取り上げていただいた。また、2021年2月27日～3月21日の期間、松本市立中央図書館にてサテライト企画展を開催した。本来は、もう1-2の企画展を開催したかったところではあるが、コロナ禍による図書館自体の臨時休館や予約図書のみでの貸与期間も長く、一つの企画のみを実現させることにとどまった。また、地質学分野の試料を中心とした「チバニアン（チバセクション）と信州の地質」に焦点を当てた企画サテライト展示と関連ワークショップを2020年10月に信毎メディアガーデンにて開催した。これらのサテライト企画展示は、学芸員養成課程の学生や修了学生の積極的な参画のもとに実現することができた。

2020年9月には、信州昆虫学会との共催により、生物多様性に関する公開シンポジウム（対面・オンライン併用）を開催し、オンラインでは北海道や沖縄からの参加者も含めた130名超の聴講があった。また2021年2月には、長野県自然保護課やNPO生物多様性ネットきずなどの共催のもと、オンラインシンポジウムを開催し、約70名の聴講があった。

|  |                 |   |
|--|-----------------|---|
| <p>2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望</p> <p>（達成の度合いを選び、そう評価する理由と今後の展望を記述）</p> | <p>a. 達成できた</p> | <p>（評価理由）</p> <p>コロナ禍による計画変更や規模の縮小は余儀なくされたものの、計画していた事業の大きな柱に関する部分については、ほぼ計画通りに達成することができた。特に、上記の項目②については、コロナ禍の影響を全く受けることなく、国際データベースへの登録件数を着実に伸ばすことができた。加えて、上記のように例年になく多くの学生が全国規模のオンライン講座に参加することができた。</p>   |
|  |                 | <p>（今後の展望）</p> <p>項目①については、次年度には対面での授業・実習が（今年度よりも）増加する可能性が高く、より一層の活性化を図ることができるものと期待される。</p> <p>項目②については、複数年にわたって構築してきた国立科学博物館との業務提携や連携のもと、次年度以降も継続して実施して行く予定である。</p> <p>項目③については、一般市民が多く利用する施設である松本市立中央図書館・信毎メディアガーデンでのサテライト企画展示を実現することができ、次年度以降も同様のサテライト企画を既に立案し、スケジュール調整の段階にある。</p> |